アルテス　リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）
第八〇号　二〇〇七年六月　一〇一頁～一一四頁

岩手大学情報メディアセンター図書館蔵『ぼろぼろの草子』について
報告および翻刻

家井　美千子

はじめに

「お伽草子」と呼ばれる物語群の中に、通称を『ぼろぼろの草子』とする室町時代の物語がある。

「ぼろぼろ」という名は、『徒然草』第一一五段に、

　ぼろ〳〵といふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ・梵字・漢字など云ひける者、その始めなりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執深く、仏道を願ふに似て、闘諍をこととす。放逸無慙の有様なれども、死を軽くして、少しもなづまざるかたのいさぎよく覚えて、人の語りしまゝに書き付け侍るなり。[注一]

と述べられた、著者兼好の同時代に存在していた仏教僧の一種である「ぼろぼろ」によるであろう。

ただし、この物語で「ぼろぼろ」は「放逸無慙の徒としての面は薄く、むしろ仏法守護という積極的な価値と意味とが与えられている。兄弟の間で交わされる法問には多くの経典が引用されており、最後に大日、阿弥陀の化身と結ぶことなどからも、法語の文芸化ととらえられる」と指摘されている。[注二]

『ぼろぼろの草子』本文中に「ぼろぼろ」という語は現れないが、物語の中心人物である「こくうはう（虚空坊）」が「ぼろぼろ」であるために物語名として名付けられたものと考えられる。

この物語は、都の貧しい女が不思議な経緯で生んだ二人の兄弟が、それぞれ「虚空坊」「蓮華坊」と称する対照的な僧となって後、ある日再会し、「ぼろ」である虚空坊が念仏者の蓮華坊の問いに答えて多くの因縁談を語り、最後にはともに本来の姿である大日と阿弥陀の姿を顕す、というものである。

『ぼろぼろの草子』の写本については、あまり多く残っていないと考えられるが、岩手大学情報メディアセンター図書館（以下、「岩手大図書館」と略す）には、収蔵された時期・事情ともに不明ながら、以前からその存在が知られており、一方でその詳細を明らかにしてこなかったものでもあるので、今回本稿において簡単な調査結果と本文の翻刻を示すことにした。

注一　本文は、校注古典叢書『徒然草』（明治書院刊）による。
注二　『お伽草子事典』（東京堂出版二〇〇二年刊）「暮露々々のさうし」項。
　　執筆は恋田知子氏。

岩手大図書館蔵『ぼろぼろの草子』概要

岩手大図書館は、以前は岩手大学付属図書館という名称であったが、ここに『ぼろぼろの草子』が収蔵されるに至った経緯は不明である。現在「貴重書」として収蔵されている。

かつての付属図書館は、各学部ごとに分館（分室）を置きそれぞれ所蔵していた図書を、昭和四六年に「中央図書館」に統合したことで一括管理とし、また昭和五九年には建物が新築された際に蔵書を移動

したなどの経緯がある。この『ぼろぼろの草子』は、おそらく昭和四六年以前にある教員が購入し、それが中央図書館蔵書に組み入れられたものかと推測される。

一方、岩手大図書館に『ぼろぼろの草子』が収められていることは、一般には、一九八四年（昭和五九年）に刊行された『日本古典文学大事典』第五巻（岩波書店）の「ぼろぼろの草子」の項目で、「諸本」において「岩手大学蔵写本（有欠）」で知られたといえよう。

また、岩手大図書館蔵本については、恋田知子氏が、中世後期の絵巻享受の場について考察した論[注3]において、挿絵を示しながら次のように指摘している。

岩手大学図書館蔵本は、これまで絵入り写本であることが知られていたが、あらためて精査した結果、紺地金泥表紙の典型的な横型奈良絵本であることが判明した。この本は前半部分を欠くが、物語の半ばにあたる慳貪な女の話から始めて、結末にいたるもので、諸本共通の明恵の伝承的来歴も記している。挿絵は全部で七面あり、そのうち六面は、図1のように、すべて虚空坊と蓮華坊とが対決する様が、背景のみ違えてほぼ同構図で描かれている。

（中略）

唯一、図2に示した女の股裂き場面の絵は目を引くものがある。

（略）

特に注目すべきは、版本のそれが本文に忠実に描かれているのに対し、奈良絵本では、話の主眼である女を引き裂く鬼と語り手たる虚空坊のみを抽象的に描く点である。この絵は、版本の挿絵はもとより、本文とも異なっており、それだけで絵解きの素材となっていたかのごとき体裁を示している。こういった様相は、すなわち、慳貪な女の説話が絵解きや唱導の場に即した比喩因縁であったことをうかがわせるものである。

先にも述べたように、『ぼろぼろの草子』は室町期には絵巻の形で伝存していた。果たしてそれはいかなる絵を伴ったものであったのか。［江戸前期］写の奈良絵本をもって、往時の挿絵に比定するわけにはいかないが、展開上で重要な場面を必ず絵画化するという、物語絵画の普遍的な方法としてこの奈良絵本の挿絵は参考に値する。

これによれば、岩手大図書館蔵本は「典型的な横型奈良絵本」であり、具体的根拠は示されないものの、少なくとも絵が写されたのは［江戸前期］と推定されている。同じ論文において「現在までに確認し得た伝本はすべて近世以降のもので、古写本は見いだせない」とも述べていることからも、この推定は他の伝本との比較のもとになされたと考えられる。

また、岩手大図書館蔵本の特徴として、七面あるうちの最初の絵（女の股裂き場面の絵）が、木版本の絵と異なり、室町期の絵巻の絵柄にさかのぼる可能性を持つものと指摘されている。

次に、岩手大図書館蔵本の書誌的な概要を以下に記す。

・概観

横長袋綴で、前表紙はあるが後表紙を欠いている。

墨付きは全二二丁。

少々の虫損があり、またそれを補修した跡も一部にある。第一丁から五丁まで水がかかった形跡がある。

綴糸が無くなっており、紙縒り綴で冊子の態が保たれている。最後の二二丁裏は、早くから後表紙がなくなったままこの状態であったらしく、摩擦により字が読みにくい状態になっている。

内容は全文ではなく、刊本の『ぼろぼろの草子』に比べると約三分の一の量で、物語の最初から三分の二ほどが欠けている。文章の最初は、「慳貪な女の話」の途中から開始し、物語の終わりまで続き、最後に序文的な文章が入る。

・表紙

１６６㎜×二四三㎜

表は黒に近い濃紺に金線で草花絵、見返しは梨地。

表紙中央に題簽の跡が残るが、題簽は失われている。

・本文

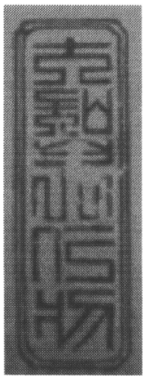
本文は、一面十二行が標準である。ただし、冊子を作る際に挿絵の位置が先に決められていたらしく、挿絵の前の本文は十二行に満たないことが多い。仮名遣いは、同じ語のハ行転呼音を示したり示さなかったり、また長音表記法も異なったりするなど、一定していないことがある。

・挿絵

全七面あり、2丁裏、6丁裏、9丁裏、12丁裏、16丁表、18丁裏、21丁表に位置する。

・蔵書印等

2丁表の、挿絵の前の空白に墨で次のような印が押されている。これ以外の旧蔵者等を示すものは、現状では見つからない。



注三　引用は、「物語草子としての形成と受容――『お湯殿の上の日記』を通じて――」（堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社二〇〇五年一一月刊に所収。）

翻刻の凡例

岩手大図書館蔵本の本文翻刻を、以下の方針で示すことにする。

・全二二丁の本文を、各丁の表・裏ごとに示す。その際、「第一丁の表」は、（1オ）のように頭書して示す。

・翻刻本文の下段に、版本との校異を示した。版本の本文は、『室町物語大成』一二に翻刻された赤木文庫蔵本による。なお、校異が仮名遣いの違いにとどまる場合は、示していない。

・校異箇所は、岩手大図書館蔵本の翻刻本文の右に傍線で示し、それに該当する版本の本文を下段に示した。傍線部の本文が版本にはない場合は「ナシ」と表記した。また、版本の本文にあっても翻刻本文に該当する文がない場合は、その箇所を翻刻本文中に「・」で示した。

・異文が、翻刻本文の一行中に複数箇所、あるいは数行にわたって複数箇所存在する場合は、傍線に番号を付け、該当する校異を判別できるようそれぞれ示した。

・絵が入る箇所には、その絵柄を簡単に説明した文を字体を替えて入れた。

・第一丁表（1オ）の校異にある＊は、虫損によって読むことが困難になっていることを示している。

以下、これらの方針により、岩手大図書館蔵本『ぼろぼろの草子』全文の翻刻を示す。

（1オ）
さるあひたにやう〳〵ひんになり
しかはりへつせんといふつまのいふ
たとひつれてはこつしきすともは
なるましといひけれはおつとか
いふやう・[1]かやうにひんになるも此身[2]
けんとんなるゆへなりしよりやう
をうらすんはかゝるひんになるへき
かとてもちいすつまかいふきやう[1][2]
こうこそ[1]かやうの事は[2]あるましけ[3]
れとてとかくしたへともつゐに
をくりぬ又[1]きば二きともさせ・に[2][3]
ゑがうといふところをすくるにに

ナシ
いはく
ナシ
ナシ
1は　2御

1のいはく　2＊
1は　2ナシ　3ナシ

1ナシ　2て　3三重の＊

（1ウ）
わかにせいてんかきくもりらいくわう
しきりにてしやちくのおうあめ
ふりてくものなかよりきわう
二人けんしてこのをんなをこ
しのなかよりひきいたしけんとん
なるもの・[1]はかやうにする・[2]とて二つ[3]
にひきさきてすてにけりとも
ものとも[1]みな・[2]しにいりぬやゝし
はらくありてこゝろつきにまなこ
をすこし[1]ひらけはもとのことくに[2]
せい〳〵となりはれたりおきあかり
かのしにんをこしにひろひいれ

でん
大
ゐのうち

うち
1を　2そ　3ナシ
ナシ
1ナシ　2きもをつふして
ナシ
1ナシ　2ナシ
ナシ

（2オ）
てちうせんし[1]へ・[2]たひしけるかつゐに
やけさりけれはちからおよはすつ
ちにほりうつみ・[1]けり・[2]のちかのおつ
といふところありてほんりやうに
あんとするこそふしきなれそのゝ
　ちかのおんなをにくまぬ
人もなかり
　けり

【蔵書印】

1中山てら　2入申

1に　2其
はつゐに
のち〳〵までも

（2ウ）
（絵）
黒雲の下、赤鬼が女の体を引き裂く。
右奥は水辺　左隅にこくう坊の姿

（3オ）
されはてんけうたいしのこにはこしん
なるもの・けんせはかきらいせはむけ
んのこうなりとてしたちにつねに
[1]おほせられけりせうしんなる・[2]は
たふん・[1]によにんのなかありおとこ
にたにも見かきらるゝ心ありお
よそおとこたる物はつまに見かき
らるゝ事なしれんけはうとふ
ていふ一さいしゆしやうに我よ人
よといふ事あるましきやらん又ほと
けにしゆしやうとしやへつなき
やらんこくうはうこたへていわく

（3ウ）
ま・たくしやへつなしまよへはしゆ
しやうさとれはほとけなりされは
たいせうきやうにいわくほとけに
あらすしゆしやうにあらすちこ
くにあらすしやうとにあらす
とときたまふこれむちにては心へ
かたししんしち・[1]こゝろさす[2]をおこ
さすんはさらにしるへから・れんけ
はうか[1]しんしち・[2]たうしんをおこ
す事もしてんせはなとかしやう
ふつせさらんや・[1]さて・[2]なんちまこ
とのくにんなれは[3]ほとけ一じふせつ

小心
は
へも
1しめし、のたまひ　2もの
1は　2うちにあると、見えたり
3おつと　4さへ
1おつと　2女
いはく
と
っ
非佛。ひしゆしやう。ひ地こく。
ひ浄土
とけり
1の　2し
す
1いはく　2の
1こくうほう、いはく　2こそ
3ナシ

（4オ）
とのへたまへりしかれはたれにつた
へたりといわんやほとけねはん・と
き一しのはなをねんきしてしやう
れんのまなこをも・てあまねく
四しゆをみ給ふ人よくほとけのみつ
しをはいりやうする事なし
たゝたいかせうはかんみせうし給ひ
てはいり・[1]うすのとき[2]ひやく
まんにんのたいしゆ一人もしんしち
をしらすかせうゑみをふくみた
まふこゝろをはたれかはしらんやさ
れはもんによつてき[1]せ[2]けせは

（4ウ）
さん世の[1]しよふつのあく[2]といへりれん
けはうは[1]とふて・[2]およそけうほう
はもんはきによつてけすてん
たいしんこんほうさう三ろんく
しやしやうしつそのほかのしよき
やうみなしんしちにあらすやこ
くうはうこたへいふしよしうの心
をさとらされはしんしつにいた
る・[1]から・[2]しからすは一たいしやう
けうをまなひゑたりともしやう
しをはなるへからすこゝろをれう
するときはいちしをしらされ共

ナシ
の
っ
かたし
1や　2其
ナシ
1り　2を
1ナシ　2た
1ナシ　2いはく
ほつそ
ナシ
ナシ
ていはく
ち
1へ　2す

（5オ）
こんけんをきるへしそのゆへは
まつくわこのほとけはかつをくしやか
によらいせつせんにいりててうさう
ろしつ六ねんたんさし給ひ・らう
けつ八日のあかつきみやうしやう
のけんするを見てさとり給ふ
しかれ[1]ともしんさんにてたれそ[2]
なに事をつたへ給ふやたうしん
もわれとおこししんしちをも
われとしり給へりたうしん・も人
にならひしんしちをも人にな
はゝなにゝよつ[1]てかによらいゆき[2]

ナシ
さん
て
1は　2〳〵
を
1り　2せつさん

（5ウ）
やまにいりてとくさしたまふへき
かそのほかれきたいのそした
ちもしんさんゆうこくに・とくさ
し給ふ[1]我とあきらめ給へりま・[2]
たく人にならへき事なしされは
とてしよきやうはいたつら事
にはあらすたとへはかう〳〵たる
ところにのほらんためのかけはし
なり八しうをみなならいえたり
と・も[1]・はし[2]のあるほとのほりたる人
まてなりしんしつのありとこ
ろをさとりてのちにけうほうを

ナシ
て
1ひて　2つ
ふ
ナシ
一
1いふと　2かけ
ち

（6オ）
みれは大なるみちのそひに
　ほそきみちのことし
けうほうのまなこ
　にかゝり心に
　とゝまる事あるへ
からすれんけはう
　とふていわく一たいの
さうきやうをまなひゑてしんしつ[2]
　をしるへきや又へちに
　しる事ありや

は
る
ナシ
1さとり　2ち
し

（6ウ）
（絵）
右　こくう坊　杖を持つ
左　れんけ坊　胸前に鉦を付け，バ
チを右手に持つ
背景は民家　戸口に縄暖簾状のもの

（7オ）
こくうは[1]うこたへていわくへつ[2]　1ナシ　2ち
にあるにはあらすなんちか申ねん
ふつにてもはやくしんしつをしる　ち
へしかしらをふりあしをおとりかね
をたゝきふしはかせをなしこゑを
あけねんふつ申さはみたのらい
かうし給ふ事あるへからすこんかう
きやうにいわくにやくいしきけん
かいおんしやうくかせにんきやう
しやたうふのうけんによらいと
とき給へり又ふつけうをしんしつ　ち
よととうはさためてうさうまう　ら

（7ウ）
ねんによつてぢごくにおつるはし
めなりなんぢ[1]しんしつと[2]しらんと　1ナシ　2ちを
おもはゝかしらをふり・おとらすとも　あしを
心をしつめてそも〳〵みしやうせん
のねんふつ・[1]にいたりぬとおもはゝこ　1申けるやいなやと、たつね。もし，未生前の念　2ゝ
れらまうねんとうちすて・[2]よく〳〵
たつぬれはみしやうせんのねんふ
つもなくいまたつぬるねんもな
くくう〳〵じやく〳〵たるときたう
りなきところにむかつてとし月
ををくりてしかうしてのちはし
めてしんしつをしるへししりへての　ち

（8オ）
ちもいよ〳〵きはむへし十たひ二　度
十たひこゝろへたりともゆたんす　度
へからすそのてんちにいたりえて
のちにけうほうはまことかきよ　も
こんかあきらかにしるへしれんけ
ほうとふていわく御はうはさやうの
てんちにいたりぬやこくうはうこた
へていわくわれはもとより一ほうを
もとら[1]す一ほうを・[2]もとめすしん　1し　2も
しちをもしらすまうこをもしら
すなにのいわれある事もたつ
ねすもとめすうまれしより此

（8ウ）
かたせんをもおもはすあくをもお
もはすしてひめむすにしよしん　も
もなくこしんもなししんしちよ　後
まうことはなんちかやうなる
くちのものにしめすごなりしよ　上智上根
こんしよちのものにはかくのことく
てをたれて・くはしくをしへすたゝ　は
てをあけこゑをいたしてあるひは　あげ
事にふれかつかはうとう一けん
はんくのなかにて大事をあ　中
きらめわかけうちうには　む
まうこもなくしんしつもなし　真実

（9オ）
又なに・てんちに　の
いたるともいたらす　さる
ともしらすされは
しんしちなくして
くう〳〵じやく〳〵には
あらすたゝみやう〳〵　めい
たり

（9ウ）
（絵）
右　こくう坊
左　れんげ坊
手前に民家の屋根

（10オ）
れんけはうとふていわく・すいふん　御房は
すゝますしりそかす一さいけうちう
ひとしゝとのたまへとも人さうし　ナシ
ろ事に申やうはいろくろ〳〵　く
とみめあしきこそうまれつき　ナシ
[1]なからかみの[2]そら[3]へおひあかりたる　1ならめ　2は　3さまに
はそるへし又いつくしきおんなを
つれやうなとゝさま〳〵なんす　ナシ
るなりわれもさやうにおもふなり　いはく
こくうはうこたへていふみな人は　ん
かんきよくなりたいろうほさつた
らにきやう又たいせうさんまい

（10ウ）
きやうとうに・たのひをはうする事　いはく
なかれはうせさる・はたいしなしほう　もの
するしゆしやうはけたうなりされ　一ど
はあくしゆしやうはひとたひしやをひ　に
るかへせはしやう・きすげだうは
つゐにしやうにきせすととけり
[1]これまさし[2]くによらいのきんけん　1ナシ　2き
なりたとへいちたいのしやうけう　ひ
をのみさすまなひえたりとも　こ
一たんもたをほうしてはしやうほう　ナシ
にてあるへからすたいせうにもせう
せうにもたのひをとくへからす

（11オ）
たのせをもわきまうへからす
いかにいはん・ひをやととけりしかれ
はせんはう・[1]ものよりかさねての[2]
とかなり・一たんもしこの事を
わすれすはんけんもたのひを
とくへから・といへりそのうへ我に
さしてあやまる事あらはむかつて
こそいふへきにとりつめたるひか
事はなしたゝたいをくひやうの
ものゝくちのいたつらなるまゝをの
れかこう[1]くわをひきいたし[2]て
いへりしよ人まことゝ心へてぜひ

や
1する 2重罪
又
へ
す
ひ
ナシ
己か
1つ 2て

（11ウ）
[1]をいわすされは一人きよをてん[2]す
れはばんにんまことをつたふとい
へりあわれうしろことをいかなる
ものかいふらんしりなはほそくひう
ちをとししやうをてんせさせたら
はそこはくますへしわかてうにも
た人のひをそしらさる人あり
みなもとの八まん大らよしいゑの
あつそんはきうはのいゑになをえ
たりし人なりあひしたかふ人に
しめしけるはたのひをいふはをくひやう
たい一のものなりおよそをくひやう・

1ナシ 2つたふ
実

はうせ
太郎
ナシ
る
なる

（12オ）
ものはまつたのひをあけてきを
あさむくせうふをこのみ三ほう
をうやまはすしんぎにおろそかなり
といへりしかれはなをあけいゑを
こうししそんいまにたえすしやう
ぢきだい一の人と申なり

き
ナシ
のたま
おこ

（12ウ）
（絵）
右　こくう坊
左　れんげ坊
人物の右に花の木（あるいは紅葉）
背景に紅葉の山

（13オ）
又なかころはうしうのこくし
のたいくわんにくにをとりしは
しめうしろことにたのひをいふも
のを六十三人きりあつめてか
しまのをきにしつめ給ふさてこそ
そのくにのおさまる事さんくわう
こていのむかしのことしかのたいら
のしやうしはけんにんた[1]一[2]にして
かしまのみやうしんとものかたり
するほとのひとなりとほまれを
いまにのこすなりおよそくにのお
さまらさるは人のうしろ事を

1じ　2第

（13ウ）
こんほんとすされはうしろことはけ
たうのわさなりまたかみをそらぬ
といういふほとにこれ又くちなりいつれ　ナシ
のほとけかかみ・そり給ふそやほさつ　を
のなかにもすこしかみのそら・におい　さま
あかりいろのくろききらはゝふとう　をい
をきらふへしそのうへこんかうふつは
たいりやくかくのことしすかたの・にく　み
きをきらはゝかゝるほとけいたつら
事かことにわかかしらにはくわゑん　うしろ
もなしはもくひちかわすふとう
にあわすれはすいふんのひそう

（14オ）
なりなんちかことくしろくこへたる
をたつとむへくはまんちううんひん
ゆきやまをたつとむへしれん
けはういふてんたいのしやくにあく
とせんとをこくひやくにたとへて
あくをはこくこうといふせんをはひやく
こうといふこれしろきはおとれるや
こくうはうこたへていふもとよりせん
あくふになれはこくひやくをろん
せされともまつしるへししやうわう
しやくひやくはそめ・やすしこくし
きはたのいろにをかされぬものな

いはく
ナシ
ひ
1ひける。ひやくは、をとれり
や、いかん　2いはく
り

（14ウ）
りされはたうしんのものころもを
すみにそむなんちいまゝてくちに
してたのいろにをかされしよしんの
ねんふつ・[1]なりれんけはうとふてい
わくこへたる・やせたるにおとれりや
こくうはういふおと・[2]りそのゆへはとを
きたとへはしはらくをくなんちとす
まう・とらんわれにかつへからすいさ
はしりくらへせんなんちを十ちやう
かうちに二三ちやうさきにたてた
りとも我をとるへからすれんけ
はういふかゝる事はさうたんなり

じや
1しや　2ナシ
は
1いはく　2れ
き。さあらは
を
1いはく　2わ

（15オ）
しやうし一大事をなにと・すへきや　か
こくうはうこたへていふなにとすへ　いはく
きとおもふこゝろをせつなもすて
すなをすへしれんけはう・さする　1坐をな　2いはく
はかりにてきやうちうさくわはかなふ
へきやこくうはういふきやうすると　1いはく　2行時は、ゆく
きはきやうとともにわすれすちう
するときはちうとともにわすれ
すさするときはさととも・わすれ　に
すくわするときはくわとともにわ　1ふす　2ふす
すれすしよくするときはしよくと
ともにわすれすねふるときはね

（15ウ）
ふるとともにわすれすいかん〳〵と　り
おもふ心をこつすいにとをるときのう　1ナシ　2ナシ
へにしよふつ・なくしたにしゆしやう・　1も　2も
なくはんしをわするへしかくのこ
とくならはそのせんあく一へんに　ナシ
なるへしもし一へん・ならは五日十日　に
のうちにひごろのふしんやふれて
のちにもなをたいしをおこしなみた　1ナシ　2大に、こゝろさし
とともにをきなみたとともにふし
きやうちうさ・さとるにもほこらすせ　1くわ　2お
いさい・ちやくすへしもししからはかんるい　に
きもにめいしふしんのこるへからすれんけ　らす
はうこたへていふ　とうていはく

（16オ）
（絵）
右　こくう坊
左　れんげ坊
人物の手前に灌木

（16ウ）
しからはしやうとのふしんはかりはる　いはく
へきかこくうはうこたへていふしよ　ナシ
きやうはさま〳〵なりといへともわう
さうをきわめのほり〳〵ていかんと
もせさるところに見れはしよしう
みなをなしたいなりたゝさきのいかん　どう
かといふことはきんけんなりたとへは　ナシ
ゆきとこほりといふきへてはおなしみつ　いへとも。とけては、同水
なりされはあるうたに　和哥
なにとたゝ雪と
こほりをへたつらん
とくれはおなし

（17オ）

たに河の水

とゑひせり又ほうもかくのことく　し
さとり・のちに[1]すこしふつほうの　1て　2ナシ
たうりをゆめほとものこらはい
またまことにさとらさるなりさ　実
れはかうりもしやあれはてんち
はるかにへたたるさらにそうあ
ひなけれはとうねんとしてめい
はくなりといへりさとりえてのち　こ
にかりにもほうにまんしんをお・す
事なかれたいはんにやきやうに
いわくすねんのしやうきようは

（17ウ）

一日のまんしんにやふるととけり　時
わかてうにもきそうかうそうと
いへる人おほくまたうにおち給ふ
しせうふんみやうなりせうけする　たしか
にをよはすたとへはほうのことくせつ　によほう、によせつを
のことくまほりきやうし五十ねん　る
八十ねんをすく・ともけしはかり　ナシ
もまんしんあらはしゆするとこ
ろのほうみなまほふとなるへし　ナシ
そのいわれおほしたいせうせう
のせつにしこをさとらすして
たをほむるもまふこなりいかに

（18オ）

いわんやをのれをほめたをそし
るものまつまかいにいりてむりやう　のちに
こうをへてものちくむけんぢ　の
ごくにおつむかしこうほうたいし・　ナシ
御でしにりやうしんそうづとて
たいしにもいくほとおとらさるそう　ナシ
ありだいしやうろんのときたち
まちにくしんをこんしきとなし
たまふ事[1]をみてすこし[2]もおとら　1ナシ　2しやうしん、われ
しとおもはれけれは

（18ウ）

（絵）

右　こくう坊

左　れんげ坊

左奥に、暖簾の下がった二つの戸口

（19オ）
りやうかんぬけてちにおちそのゝ
ちまたうにおつるたいしこれをあ
われみたまひてひんみつのほう
をも・てりやうしんをまたうよ
りよひいたしてといたまふにりや
うしんこたへていわくわれかねて
よりかりにもしにおとらしとお
もふによつてまたうにおつま・くけん
はせうちこくなりと申さるその
ときたいししゆ〳〵のしやうほうを
ときをしへたまへともりやうしん
しやほうにきゝなしいかやうにの

ナシ
ナシ
つ
ひければ
1り　2の

（19ウ）
給ふともたいしのおしへはもうこう
と心へてありけれはたいしち
からなくかへしたまふされは人の
くちおしきはまんしんなりれん
けはうとふていわく此三十ねんの
あひたしやうとしうといふ人おほ
けれとも我ほと十二ときおこた
らすしゆきやうする物なしとおもふ
なりしかれはしやうとうしうなれ
ともよにつたなくおもひけりい
まこそおもひしられたれ・まんしん
のいたすところなり三十ねんの

1へ　2ナシ
1およはす　2ひぬ
1ナシ　2か
時中
ひし
浄土宗
これ

（20オ）
あひたかくのことくおもひしかはわ
れまたうにおつへきやこくうはう
こたへていわくすねん・まんしんを
かそふるにたらすたとひいかなるまん
しんなりともしやをひるかへして
しやうとなきはなにのまたうと
かいわんまたうにおちさらんさきに
そのまんしんをあらいすつへし
またうにおちてこうくわいせんはん
すともその・いあるへからすれんけ
はうとふていわくそのまんしんをは
なにとかあら・すつへきそやじひ

し
1ナシ　1の
せんこう、まんこうの
さ
か
ナシ
1ナシ　2い　3ナシ

（20ウ）
をも・てわれをとし給へといふこ
くうはうこたへていわくしひをもつ
てのゆへなりとてたいりきりやう
をいたしてとくちやうをも・てはつた
とうつと見えしかれんけ・もなく
とうきやうはうもなくれんちうも
見えす三十人はかりのてしも
見えす

つ
ナシ
つ
ほう

（21オ）
（絵）
右　こくう坊
左　れんげ坊
背景に紅葉の山

（21ウ）
そのゝちこくうはういふあらおひた
たしのふつほさつのくちのさかなさ
よといひしか二三十人はかりのこゑ
してとつとわらい・こくうはうも
うせにけりそのころ見きく人けん
めうしゆせうのほうもんかなとき
いのおもひをなせり此ものかたり
よく〳〵きくへしされともくち
のもののためには[1]・しんしちのほう
りなりき〳〵ゑて[2]すなわちしやう[3]
すへしされはいま人おほくあや
まれりされともふつほさつけん

ナシ
ナシ
て
や

1およばず。ちあるものゝために
は　2は　3佛果をな
るによりて

（22オ）
し給ひて[1]はうへんの・[2]もんをひら
きしんしちのさうをしめし給ふ
かのきそうたちのほんち・こくうはう
はたいにちによらいれんけはう
はあみたにによらいれんちうはくわん
おんとうきやうはうはせいしほさつの
けんけなりそのせうこふんみやう
なり・[1]うたかふへからす〳〵[2]
とかのをのみやうゑしやうにん・ゆい
こんに此はこひらくへからすとて
すきのはこ一ありきんねんりやく
おうくわんねん・[1]かのはこをねすみかう[2]

1ナシ　2ほう
は
あきらか
1いさゝか　2云云
の
れき
1に　2み

（22ウ）
はしたりそのなかをみれはかわふ
くろありこのかわはかわうそのかわ
なりこれはひにもやけすみつに
にもおもれすかるかゆへにつゝまれ
たりかのしやうにんのゆいこんなれ
はとてあへてひろうする事なし
されともてんか・そのかくれなきに
よつてみかとちよくしをもつてめ
され□れはちからおよはすしんしやう
すそのゝち此ほんせけんへひろめら
るゝといへりもつともひすへし〳〵

やふり
ナシ
ナシ
ほ
に
け
にるふす
ナシ